



小京都の
風情じゃな。



秋月氏から黒田氏へ

古処山の麓にたえずむ、小さな城下町。秋月は、町がそっくりそのまま、タイムカプセル。
秋月氏400年、黒田氏250年の栄華を秘めて、まどろんでいます。

秋月の名前は古く、すでに平安時代中期に「秋月荘」として、史書に顔をのぞかせています。そして、鎌倉時代、原田種雄が古処山に城をかまえ、秋月氏を名のり、この地は二帯の政治の中心地となつて、文化が芽生え、秋月は城下町としての歴史を刻むこととなります。

秋月氏は漢の高祖の末裔と称する渡来人の阿多倍(あたとえ)王の血をひく名族で、平安中期には、藤原純友の乱の鎮圧に功績を残し、西国平氏を支える有力な一族だったと伝えられています。種雄治政以降、秋月氏は西国二帯、とくに筑前において威勢をふるい、西国の覇者として君臨します。この秋月氏の隆盛は約400年間にもわたり、今日の筑前の小京都とたたえられる秋月城下町の文化の伝統の礎は、この間に築かれ、発展します。

そして、秋月氏十六代種実の治政下、城下町は、暗転の時を迎えます。平安の夢を破ったのは、天下を統一しつつあった豊臣秀吉で、秀吉はきわめて強引に種実に降伏を迫っています。種実の重臣、恵利暢亮は、秀吉の軍の強大さを知り、主君に降服をすすめたのですが、種実はこの忠言を聞き入れず、島津氏との盟約を重んじ抗戦の構えを崩しませんでした。種実の怒りに触れた暢亮は切腹。暢亮が切腹したという大岩がいまも秋月の山裾に残り、秋月氏暗転のドラマを伝えています。秋月氏は、秀吉の軍に敗北。日向の高鍋藩に移封され、この地にただその名のみを残して、城下町の歴史から退場します。

そして、秋月城下町は、第二幕ともいうべき、黒田氏の時代を迎えることになるのです。

甘木・朝倉歴史散歩〜時を歩く旅ガイド〜より



一本木地蔵堂(朝倉市) MAP D-5

天正9年(1581年)大友氏と秋月氏が戦国時代に争った合戦の一つが『原鶴の合戦』。現在の原鶴温泉の一の本木地蔵堂の辺りと言われています。



安見ヶ城山(朝倉市) MAP B-3

朝倉市街の北東大平山に連なる安見ヶ城山は、かつて秋月氏と大友氏が壮絶な戦いを繰り広げた「休松の戦い」がありました。永禄10年(1567年)に大友軍二万余騎が秋月に押し寄せた後、秋月軍が夜討で休松城に総攻撃をかけ、大友軍が筑後に敗走することになります。



松尾城跡
(東峰村) MAP A-6

戦国時代に、秋月氏の家臣であったとされる宝珠山山城守の居城。慶長5年(1600年)に黒田長政が筑前に入国し領内に6つの端城を設けました。松尾城は中間統胤が城主となります。その後、一国一城令により取り壊されました。



お城の跡ですか。

ここが
どこ
観知
ですよ!!



甘木盆伎(朝倉市)

元禄12年(1699年)、庄屋町原喜左エ門が子供に踊りを教えて祇園社の開山式に奉納し町々を巡演した風流が始まり。初めは風流・舞・操り・神楽等であったのが次第に歌舞伎に転向し、やがて歌舞伎として固定化され、甘木全町をあげて熟演されるようになりました。毎年10月中旬頃朝倉市甘木で上演されています。



秋月月光流太鼓(朝倉市)

寛永元年(1624年)福岡藩主黒田長政の三男長興が秋月に入封の時、家臣が満月の夜に月光に照らされて打った太鼓の桴(ばち)の影から編み出したとされる曲打ち。4月の秋月春祭り、9月の秋月観月会で演じられます。

